

実際に見て、聞いて、触れて感じたことは強い。これに一寸した失敗談のおまけでもつけば、生徒達の瞳の輝きは更に増幅して行く。

今は、あのマーケットの勾いまでもが不思議に懐しい。
(3回生)

四半世紀

阪尾 スミ子

去年の今ごろは、はじけんばかりの中生たちのエネルギーを、はっと受け止めて(?)講師生活の日々でした。それはずしりと手応えのある充実感に満ちたものでした。そして現在対照的とはいえ、結構忙しい主婦の座にもどっています。

さて、あっという間に五十歳の大台に乗ってしまった今、来し方を振り返ってみると——。最初の四半世紀一娘時代—の何と単調だったことでしょう。まっしぐらに、いわば自分の思いのままに進むことのできた時期、努力さえすれば道は拓けると信じられたのでした。家庭とは私を伸び伸び成長させてくれる大切な母胎で、自分が主役ではありませんから特に束縛を感じることもなく過しました。ところが第二の四半世紀の何と多面的なこと!! 外で仕事を持ちながら家庭では、妻、嫁、主婦、母などに变身しながらの役割があり、一日が三十時間あったらなあと思ひながら暮したものでした。教職という仕事は日々新たなりで頭脳も、それ以上に肉体もフル回転を強いられます。社会科ではどどん学んでいかないと自分が涸渇してしまいます。また生徒との対応も千差万別で、これは経験を積み重ねて次第に力になっていくものでしょう。私が専任をやめたのは、勤めて十二年、まあ軌道に乗っていた時期です。けれども、病身の姑の調子が良くないこと、二番目の子を頼んでいた母も体力的に大変になってきたこと——つまり家庭では私を最も必要としており、その中で責任ある仕事と両立していけるかに直面しての選択だったわけです。悔いは全くありませんでした。ある時発熱した下の子をおんぶして寒空のもとお医者様へ急ぎながら、幸せだなあと思ったことを今でもはっきり覚えています。というのは上の子の場合0歳から入学まで保育所でお世話になり本当にありがたかったのですが、病氣の時は大変でした。「お迎えに来てください」と職場へ電話が入りますと、すぐ授業のお手当てをしなければなりません。四方八方への気配り—それを

思い出すと何と幸せかという思いになるのでした。家事の明け暮れは同じことのくり返し、誰に評価されるわけでもなしと考えれば張り合いもないでしょう。でも私はけっこう創造的な仕事と思いましたし、自分がかねめにいればこそ家庭は滑らかに動き、家族の力も生き、安堵も得られるかけがえなく大切な役割と思っていました。確かに自分はどこへ行ってしまったんだろうと自問自答したこともありますが、人はその立場でそれぞれ長所を生かし合って生きていくものだと思います。また地域社会などで、全然ちがう世界、生き方をしている友人たちに恵まれたのも、すばらしい財産です。今、主婦が働いたり学んだり楽しんだりする場面はたくさんあって、それを選ぶ自由を持っているのは本当に幸せだと思うのです。

こんな生活を八年ほどしてから、また元の職場に呼ばれ、講師生活がはじまりました。姑はすでに亡く、子どもたちも成長して勤めの支障はありません。すっかりさまがわりした中学校では、体を張っての授業(?)ではあっても苦も染もありです。教材の準備などよい頭の刺激となり、適度の緊張感も快いものでした。

昨春この生活を変えたのは、一人暮らしの母の健康です。育児については保育所などがありますが、老親をどうみるか、やっぱり家族にゆだねられているのが現状ですし、まして子どもが世話になった母のことです。そしてこれが本音かも——次のつまり第三の四半世紀こそ、主体的に道を拓いていきたいという願いです。主婦の自由さから、お茶大で用意してくださった市川巡検に参加して、その楽しかったこと!!前年の三浦半島の時も同じでした。第一線でご活躍の先生方と学生時代にかえってご一緒できるとは!! 中味の濃い第三の四半世紀(第二の青春でもあります)を旨ざして、胸のふくらむこのごろです。

(5回生)